

NHK 解説委員

室山 哲也 さん



今回は、NHK 解説委員の室山哲也さんにお話を伺った。室山さんが手がけた科学番組を誰もが一度はご覧になっているはずである。チェルノブイリで見聞したこと、人間と科学技術の関わり合い方等々、話が尽きないインタビューであった。誌面の関係でほんの一部しかお伝えできないことが非常に残念である。

(聞き手・構成：中島 美砂子)

——NHKの科学番組に多く関わっていらっしゃいますが、もともと理系のご出身なのですか。

いいえ、法学部出身です(笑)。物理や数学といった理系の科目は大嫌い、典型的な文系人間です。NHKに入局して最初の任地は宮崎で、ヒューマンドキュメンタリーや「おかあさんといっしょ」などさまざまな番組を制作し、大変楽しく過ごしていたところ、入局5年目になって、突然、科学番組部への異動となりました。科学番組部とは思ってもよらず、「何かの間違いではないか」と東京の人事部に電話を掛けたくらいです。

——てっきり理系ご出身の方だと思っていました。

文系出身の科学解説委員は珍しいのです。文系出身ですから、科学のことは何も知りません。科学の専門家に質問するときは子どものように素朴に聞いています。科学のことを知らないということも恥ずかしくありません。むしろ、知らないことが「武器」になります。専門家が絶対にしないような質問ができますからね。

科学は非常に専門的な反面、その成果は私たちの生活に直結しますから、社会と連動して科学を考えることが求められます。そのためには、科学という専門的

な分野で起きていることを、その分野に埋没させずに、一般の人々にわかりやすく伝える「科学コミュニケーション」が大切です。専門的な分野ではあるが、私たちの生活と直結しているという意味では、科学も法律も似ていますね。

——なるほど、そうですね。

専門的な分野と社会をつなぐことこそマスコミの仕事だと言えるかもしれません。以前、先輩のプロデューサーが、番組作りの秘訣は「高度な平凡性」をもつことだと話していました。平凡であることがとても重要だというわけです。自分がわからないことをわかるまで普通の言葉で何回も尋ねて、わかったことを皆さんに伝えていく、この30年間、そういう仕事を続けてきました。

——科学番組を制作するにあたって心がけていることがありましたら教えてください。

科学番組の制作で陥りやすい間違いは、わかったことだけで構成しようとすることです。まず、何を知りたいか、問題意識で構造を作り、調査した結果、ここ

まではわかったが、ここから先はわかりません、というような番組作りでなければなりません。わかったふりをしてはいけませんね。

——現在は「科学大好き土よう塾」（NHK教育・土曜日午前9時15分～）に出演されています。子どもたちの理科離れが進んでいるようですが。

最近の子どもたちは、自分の頭で考えずに結論に飛びつく「プロセス・カット」といった傾向にあると思います。生きる力がない、と言ってもいいかもしれません。自分がいろいろなことに突き当たって結論を見つけ出していくことが重要なのですが。

昆虫取りを例にとれば、雨も降るし、風も吹くし、なかなか見つからない、我慢が必要です。そこで、自分の頭を使ってあの手この手を考えてみる。こうして物事を考えて自分の力で生きていく、生きる力をどう伝えていくかが大切だと思います。

番組では、子どもたちに知識よりも知恵、科学する心を伝えていきたいのです。「どうして?」と考えること、わかったときに「気持ちがいい」ことを体験する。私たち番組スタッフは、子どもたちが考えていくことを手伝うだけで、「いっしょに勉強しましょう」とは絶対に言いません。番組の合言葉は「実験、体験、大発見」なのですが、これが科学の基本だと思います。

——その他、チェルノブイリ原発事故に関しては、精力的に取材、番組を制作されていますね。

この事故が発生した当初は、事故を起こした4号炉の30キロゾーンに放射性物質があると考えられていました。しかし、3年後に調べてみたら、放射性物質の相当部分がゾーンの外に出ていたことがわかりました。さらに、放射性物質が雨に乗って凝縮されるメカニズムによって、雨を恵みの水とする穀倉地帯が汚染されていたのです。このような「ホットスポット」と呼ばれる高濃度汚染地帯が点在し、そこには多くの人が暮らしていたため、チェルノブイリは大混乱に陥りました。

こうした状況をドキュメンタリーとして追いかけて、さまざまな人間模様に出会いました。ですから、ヘリコプターに乗って事故現場を上空から見るときは、涙が止まりませんでした。人間が科学技術を運用していく上で、どこまで許されるのか、どこからが駄目なの



番組作りの秘訣は「高度な平凡性」をもつこと。自分がわからないことをわかるまで普通の言葉で何回も尋ねて、わかったことを伝えていくのです。

プロフィール むろやま・てつや

1976年、NHK入局。「ウルトラアイ」などの科学番組ディレクターを経て、チーフプロデューサーとして「NHKスペシャル」「クローズアップ現代」を担当。主な担当番組として「驚異の小宇宙 人体2・脳と心」（1994年）、「私のなかの他人～現代社会が生む多重人格症」（1995年）、「終わりなき人体汚染～チェルノブイリ事故から10年」（1996年）、「シリーズ阪神大震災・その死を無駄にしない」（1996年）、「アイデア対決ロボットコンテスト」（1997年～）など多数。2002年から解説委員（現職）。

か。科学技術をうまく運用していくためには、技術だけでなく、管理していく人間のネットワークや民主主義、社会の成熟があって初めて可能なのでしょう。この取材を通じて人間の歴史そのものをみたような気がしました。このような番組を制作するたびに、自分の人生が揺さぶられますし、記憶にも残ります。

——弁護士に対して何か伝えたいことはありますか。

正義を守ってほしいと思います。凛として、弱い者、人間の尊厳を護っていく頼もしい存在であってほしいですね。ある科学者が「よく切れる刃物は上手に使うと人を生かす手術のメスになるが、人を殺すドスにもなる。メスにするのかドスにするのか、人間が決める」と言いました。科学技術も法律も、私たち人間のために存在するツールなのです。何のためにツールを使っていくのか、きちっとしていないと大変なことになります。ですから、法律やルールはしっかりしたものであってほしいですし、そのためにも法律家がしっかりしていく必要があると思います。

——本日はありがとうございました。